

「フロー」から「抽象的スキーマ」へと結実させるには？

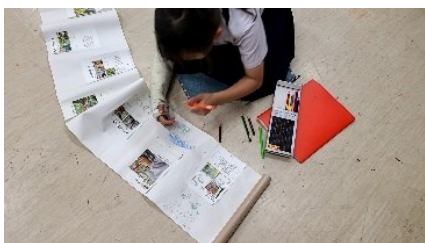
心理学者M. チクセントミハイは、人間がその活動に完全に圧倒されているとき、「行為と意識が融合」し、「自己意識が消失する」と指摘しています。自分の行為にあまりに没頭しているため、自我を守ること（失敗への不安や他者からの評価など）に注意を向けられない状態です。ここで浮かび上がるのが、「自己を忘れてフロー状態にある子供は、自らの学びをメタ的に捉えることが極めて難しい」という事実です。だからこそ、子供たちがフロー状態を経験した後に、いかにして各教科の「抽象的スキーマ」へと結実させていくのか、伴走者としての私たちの見取りと問いかけが問われています。

体育科では、これまでの遊びをカスタマイズした3つの場が提示されました。棒でタッチしてくる相手に応じて毎回ランダムに動き、思わず仲間同士ぶつかるほど行為に没頭する「トレジャーハント」。性質上、フローの性質が高い場であると見受けました。一方で、投げた後に次の投球までのインターバルがあり、自分の身体と繰り返し対話できる「ターゲットアタッカー」。そして、仲間のゴムの引き方で跳び方が変わる様子をじっと見つめる「待ち」の時間があり、動きをメタ的に確認できる「フライングリング」。



このように、活動の中で「没頭によって身体感覚を高めること」はもちろん大切であり、同時に、そこにあるインターバルや他者を見る時間を通して、子供たちは「自らの動きをメタ的に認知」し始めるものと思われれます。この往還があって初めて、心身をコントロールする「抽象的スキーマ」へと結実していくのでしよう。

生活科では、子供たちは手軽なプランターではなく「敢えて畑で」夏野菜を育てていました。「茎が折れた」「つるが伸びた」という思い通りにならないピンチ（挑戦）の渦中、子供たちは自己を忘れたフロー状態であったことでしょう。本時では、その取りためた記録を絵巻物にまとめるリフレクションの場が設定されました。2年生6月時点の子供たちは、多くが「1つの出来事に1つの振り返り」という直感的な思考の枠内にあります。しかし、その巻物の余白を覗くと、当時の情動にジャンプして追体験する子、「15日経つと…」と時間経過を意識する子、過去の栽培を「昨日食べた」という現在の生活に接続する子など、主観的な経験をメタ的に捉え直そうとする多様な変容の萌芽が確かに見られました。この、個別具体的な気づきの種（基礎的・具体的スキーマ）を教師がどう価値付け、他者と響き合わせるかが、子供たちの具体的スキーマを「実行力」へと結実させていくかの鍵となりそうです。



こうした、環境や対象（ひと・もの・こと）、あるいは自らの身体との「生々しい相互交渉」から立ち上がるフロー状態と、それを一步引いて見つめ直すメタ認知の往還こそが、子供たちに内発的な連動を生み出し、認知・非認知能力を統合していく原動力となります。

（木村 仁）